

定訓と解釈をめぐつて

高橋和巳氏の注釈態度と加地伸行氏の漢文教育論

古田島洋介*

本誌第五〇八号において、〈漢文訓読Ⅱ記憶術〉論を骨子に、訓読にまつわる種々の問題を論じてきた。すでに趣旨は十分に御理解いただいているものと思うが、ここに古い書物一冊と新しい文章一篇を取り上げ、所論の出発点たる定訓と解釈の問題について若干の私見を補足しておきたい。取り上げる書物と文章は、次のとおりである。

- ・高橋和巳「注」『李商隱』(《中国詩人選集》15、岩波書店、昭和三十三年)
- ・加地伸行「漢文は死んだか」(《中央公論》平成十二年五月号)

一
不勉強にして、高橋和巳氏に漢文訓読論が存在するか否かは未だ詳らかにしない。けれども、その注釈に係る『李商隱』を読むかぎり、定訓

定訓と解釈をめぐつて

古田島洋介 * 言語文化学科 助教授 日中比較文学

と解釈とのあいだにずれが生じた場合、高橋氏がそれを明確に意識し、なんとか注釈にも反映させようとしていたことは、たしかな事実である。訓読が原文の記憶術である以上、解釈の如何を問わず、原文の字の記憶にとって都合のよい定訓を読みとして採るのは当然のことであり、私の狭い経験から言っても、漢詩の注釈に臨めば、時おり定訓と解釈のずれに遭遇する。問題は、それを注釈のうえで、どのように処理するかだ。定訓は定訓、解釈は解釈と割り切り、ただ意味だけを注して、あっさりすませるのも一法である。しかし、その場合は、読者に定訓と解釈のずれを納得してもらえないかどうが大いに不安が残る。残念なことに、未だ〈漢文訓読Ⅱ記憶術〉論が定説として普及しているわけではないからだ。では、定訓と解釈のずれを丁寧に説明すればよいのかというと、それでは注釈として散漫に陥るおそれがあり、しかも一箇所だけで説明を加えるのは不自然だからと、定訓と解釈がずれを起こすたびに説明を記すとなれば、勢い冗長になるのを避けられない。ここに注釈者の一つの悩みが存するわけだ。むろん、裏を返せば、そこが注釈者の腕の見せどころにもなる。

もっとも、無学を棚に上げて言わせてもらえば、たいいていの注釈者は前者の方法ですませているようだ。それが簡潔を期しての結果なのか、定訓と解釈のずれに対する鈍感ゆえの結果なのかはわからない。だが、いづれにしても、読者には「訓読は訓読、解釈は解釈。漢文訓読とはそういうものだ」との印象を与えるだろう。不真面目な読者ならば、どう訓読するかなぞそっちのけ、ひたすら意味だけを理解して事足りりかもしれない。けれども、真面目な読者は、訓読の日本語の意味と解釈の日本語の意味がどうしても結びつかず、気持ちの悪い思いをするだろう。真面目なだけに、「漢文訓読とはそういうものだ」では納得しまい。「そ

ういうものだ」の内実を明かせば、〈漢文訓読Ⅱ記憶術〉論にほかならないはずなのであるが。

こうした一般の注釈態度のなかにあって、高橋氏の注釈ぶりはいささか目を引くものである。《中国詩人選集》をざっと見渡すかぎりでも、定訓と解釈とのずれに対して、おそらく高橋氏が最も神経質だったのではないかと想像されるのだ。たとえば「無題」詩の第三・四句を見てみると――

春蠶到死絲方盡 春蚕 死に到りて糸方に尽き
蠟炬成灰淚始乾 蠟炬 灰と成りて涙始めて乾く

右のように訓読してから、高橋氏は第三句「方」について左のように注する。

方はまさにと訓ずるが、その時になってはじめての意。⁽¹⁾

「訓ずるが」の助詞「が」に、高橋氏の苦渋が看取できる。――訓読では、副詞「方」は「まさに」と訓ずる習慣だ。だが、この「まさに」という日本語からへその時になってはじめての意を汲み取ることとはできない。しかし、ここでの「方」は、それこそまさにへその時になってはじめてと解釈すべきなのである。――こうした煩悶の末に書き記したのが、右の注の字句だったのであろう。なぜ定訓と解釈にずれが生じるのかという問題について、高橋氏は明快な解答を用意していなかったかもしれない。しかし、少なくとも、訓読のはらむ問題に気づいていたことだけはたしかだ。その証拠に、「秋日晚思」詩の第一・二句「桐槿日

零落、雨餘方寂寥」を「桐槿 日びに零落し/雨余 方に寂寥たり」と訓読しつつも、この第二句の「方」については「ちようどいま」と注を付けているだけである。上の例とは異なり、「まさにと訓ずるが」との説明は加えられていない。定訓「まさに」と解釈「ちようどいま」との距離が、「まさに」と「その時になってはじめて」との距離よりもずっと近いと判断したからであろう。高橋氏は常に定訓と解釈との距離を測りながら注釈を記していたのだ。

また、別の「無題」詩の第七・八句を例とすると――

直道相思了無益 直え相思了に益無しと道うも
未妨惆悵是清狂 未だ妨げず 惆悵は是れ清狂なるを

第七句「了」についての注は左のごとくである。

ついにとよむが、まったくの意。⁽³⁾

「よむが」は、上の例と同じく「訓ずるが」と読み換えてよいだろう。副詞「了」の定訓「ついに」を、ただちに「まったく」の意に結びつけることはできない。やはり、どうしても看過できぬずれがあると判断を下した結果、右のような注を付けたものと考ええる。もちろん、このような「了」は、音読みを用いて「了として」と訓読することもできる。しかし、「了として」と聞いても、日本語として、わかったようなわからぬような中途半端な響きしか残るまい。やはり「まったくの意」との説明が必要になるだろう。

有名な「夜雨寄北」詩の第三・四句について、高橋氏の神経は最も鋭

敏に働いたようだ。

何當共剪西窗燭

却話巴山夜雨時

何か當に共に西窓の燭を剪って

却しも話すべき 巴山夜雨の時を

この第四句「却」に関する高橋氏の注は、次のとおりである。

却はかえってと訓ずるが、さてそれから、というぐらいの意味。宋以後の小説、つまりより口語的表現を多く含む文学に、〈却説〉さて、と話題を転換する時の言葉が頻出する、その〈却〉である。

先の二例と似たような注でありながら、実は異なっていることに気づくだろう。つまり、おかしなことに、高橋氏は「却はかえってと訓ずるが」と言いながら、実際には「却って」と読まず、「却しも」と訓じているのである。定訓「かえって」と解釈「さてそれから」との乖離がよほど気になったため、どうしても定訓「かえって」を用いる気になれず、解釈を汲んで「却しも」という読み方をひねりだしたまではよかったが、「却」の説明に気を取られているうちに、自ら「却しも」と訓じたことを忘れてしまったのだろうか。そうだとすれば、定訓と解釈とのずれを埋めようとするあまり、自らの訓読と注に記した訓とにずれが生じてしまった皮肉な結果となる。あるいは、「却は」一般には「かえってと訓ずるが」、ここでは「さてそれから、というぐらいの意味」なので、「却しも」と訓読したことを了解してほしいとの意なのであろうか。そうだとすると、先に掲げた「方に」や「了に」も、なぜ「方めて」「了く」と訓じないのかという問題が生じ、訓読方針に不統一を招く結果となる。

いずれが真実であったのか、今となっては知る由もない。だが、高橋氏が定訓「かえって」と解釈「さてそれから」のずれに神経をとがらせていたことだけは、明確にうかがえるだろう。

『李商隱』を一読して気づくのは以上の三例だ。わずか三例とはいえ、高橋氏の注釈態度を知るには十分かと思う。ただし、特に「……と訓ずるが」式の説明がなくとも、やはり高橋氏が定訓と解釈とのずれを気にしていたであろうと想像させる字句はほかにもある。たとえば、おそらく李商隱の詩のなかで最も有名な「楽遊原」の第三・四句である。

夕陽無限好 夕陽 無限に好し
只是近黄昏 只是 是れ 黄昏に近し

第四句「只是」について、高橋氏は左のように記す。

そうではあるけれど、しかし、という語気⁽⁵⁾。

字句としてこそ見えないものの、この注の冒頭には「ただこれと訓ずるが」と補って差し支えないだろう。「ただこれ」という日本語をどういじくりまわしてみても、「そうではあるけれど、しかし」の語気は出てこない。ここでも高橋氏は、定訓「ただこれ」と解釈「そうではあるけれど、しかし」とのずれが気になって、右のような注を付したものとと思われる。

以上、高橋氏の『李商隱』における注釈ぶりを観察してみた。むろん、高橋氏が定訓と解釈のずれについて懇切丁寧な説明をどこしているとは言えない。「Aと訓ずるが、Bの意」式の注では、やはり訓「A」が

何のために存在するのかわからず、真面目な読者はとまどいを覚えるだろう。しかし、定訓と解釈のずれを簡潔な字句で意識させる高橋氏の注釈態度は、訓読のはらむ問題に気づかせてくれる点で、きわめて貴重なものと考ええる。

それにしても、つくづく残念に思うのは、我が非力のせいで、〈漢文訓読Ⅱ記憶術〉論が未だに定説として普及していないことである。〈漢文訓読Ⅱ記憶術〉論さえ暗黙の前提になっていれば、高橋氏の「Aと訓ずるが、Bの意」式の注でも十分に納得がゆくだろう。「方」の「まさに」、「了」の「ついに」、「却」の「かえって」、そして「只是」の「ただこれ」は、いずれも原文記憶用の定訓なのである。事は単純で、「まさに」「ついに」「かえって」「ただこれ」と訓じて暗誦しておけば、原文「方」「了」「却」「只是」が記憶しやすいというだけの話だ。むろん、聴覚記憶のみによってただちにこれらの字が再生できると言うつもりはない。「まさに」は「正」、「ついに」は「遂」「竟」「終」などの字をも想起させる。しかし、原文が「方」「了」「了」であることは、さらに視覚記憶をも動員すれば記憶できるだろう。「かえって」は、ほぼ間違いなく「却」字を脳裏に喚起する。「ただこれ」も同様だ。高橋氏が「却」を「却しも」と訓じた試みは、解釈の二法としては貴重なものの、「さてしも」という音列から、だれが「却」字を想い浮かべられるだろうか。「さて」と来れば、「扱」やら「楮」やらを想い起こし、これは国字か国訓ではなかったかと迷いを深めるのが落ちであろう。

要するに、高橋氏が試みた「Aと訓ずるが、Bの意」式の注の訓「A」は、原文を記憶するための便法にすぎない。それを前提として注すれば、高橋氏が取り上げた「方」「了」「了」「却」についても、そして「只是」についても、すっきり記述することができるだろう。「方」を例と

して示せば――

「方」〈まさに〉は原文記憶用の定訓。ここでは〈その時になってはじめて〉の意。

近い将来、右のような注釈が無条件に通用する日がやってくるのを願わずにはいられない。

二

次は、加地伸行氏の一文「漢文は死んだか」である。この文章は、教養論を兼ねた漢文教育論だ。〈教養についての教養論〉がはびこる現状を愁え、具体的な教養としての〈読み書き〉を重視せよと説き、朗読による漢文学習を勧め、伝統的な訓読の価値を高く評価する。そして、漢文学習に対する認識を問い質し、ヨーロッパにおけるラテン語と同じく、東アジアにおける共通の教養としての漢文の重要性に注意をうながしたうえで、高校の三年間はもちろん、文系に所属する大学生に対しては大学の二年間をも漢文の必修期間にせよと主張する。日本人の外国語学習は、会話の練習には重きを置かず、漢文学習に典型的に見られるように、読解を通じて日本語を鍛えることこそ主眼であったというのが、加地氏の見解だ。

文中、傾聴に値する発言は多いが、ここで注目すべきは、加地氏が訓読の価値を「翻訳の凍結」に見出だしている点であろう。訓読には定型による読み方が多い。よほど語法・文法に関する分析に相違がないかぎり、だれが訓読してもほぼ同じ結果になるという特徴がある。その読み

方が江戸時代からほとんど変わることなく踏襲されてきていればこそ、今日の我々も江戸時代の和刻本を容易に利用できるのだ。こうした共通理解を可能にさせる基盤として、加地氏は訓読による「翻訳の凍結」を高く評価する。

もともと、加地氏は、こうした伝統的な訓読のほかに、吉川幸次郎氏が試みた読み方を〈新訓読〉と名づけて紹介している。加地氏が引く〔唐〕杜甫「絶句」の例をそのまま借用すれば――

今春看又過 今春 看みす又過ぐ

右のように訓読するのが伝統的な訓読だが、吉川幸次郎氏の読み方では

今春看又過 今の春も看のあたりに又過ぐ

これが「自己の解釈に基づき新しい訓みかたを示」した〈新訓読〉というわけだ。ただし、加地氏は、相当の学力がなければ吉川流の訓読は継承が困難であり、解釈によっては訓読の結果に揺れが生じることになる。予見したうえで、〈新訓読〉の新鮮さを認めつつも、伝統的な訓読による「翻訳の凍結」を採りたいと述べる。

右の加地氏の見解は、それなりに納得できる。しかし、いささか異議がないわけでもない。以前から感じていたことだが、〈漢文訓読Ⅱ記憶術〉論を奉ずる私見によれば、吉川氏の読み方は、訓読と呼べるような代物ではなく、もちろん〈新訓読〉と称する価値もなく、ありていに言っただけ、単に吉川氏個人の趣味としか思えないのである。「今春」を「今

の春」と訓じてみても、「このはる」という音列から想起されるのは「此の春」か「是の春」くらいだろう。「今」字の記憶にとって有利とは思えない。同じく「看のあたりに」から「看」字を脳裏に浮かべるのは至難の業である。吉川氏の読み方は、原文の記憶にはほとんど役に立たない。しかも、意識してか、無意識のうちにか、上のように読んだのちなぜか吉川氏自ら解説文のなかで、「今の春も看のあたりに又た過ぎなんとす」「今春も看のあたりに又過ぎんとす」と、二度までも読み方に変更を加えているのだ。「看のあたりに」さえ守ってもらえば、あとは「今の春」だろうが「今春」だろうが、「又」に送り仮名「た」を付けようが付けまいが、「過ぐ」だろうが「過ぎなんとす」だろうが「過ぎんとす」だろうが、どうでもよろしいとのことなのか。たしかに、加地氏が危ぶむごとく、これでは「翻訳の凍結」はおぼつかない。

吉川氏が、かつての平安時代の訓読を念頭に置いて、解釈性を強く打ち出そうとしていたことは承知している。記憶術としての側面よりも、解釈としての側面がはるかに強かった往時の訓読に倣おうとの主張は、それなりの定見である。けれども、それならば、つまり解釈性を前面に押し出すならば、なぜ現代の我々が古語を以て漢文を読む必要があるのだろうか。本誌第六号の拙稿で論じたとおり、現代の我々が敢えて古語を以て訓読するのは、それが定型であるがゆえなのである。反語「豈」を「あに」と読む理由は、それが約束事だからという以外にはない。解釈を優先するのであれば、「なぜ」「どうして」などと読んでも差し支えないはずだ。いや、少しでも疑問と区別して反語らしくと心がけるならば、「なんで」と読むほうが適切かもしれない。それでも「あに」と読むのは、「豈あに」という字と発音の結合が成り立っているからなのだ。「あに」と読んでおけば、そこに「豈」字があると記憶できる。つ

まり、定型であればこそ、特定の訓から一定の字が脳裏に復原できるので。定型を破って、記憶術としてよりも解釈法として訓読を用いるのであれば、もはや古語で読む理由を失い、したがって、それにもかかわらず敢えて古語で読もうとするのは、古語で読んでおけば、なんとなく優雅な雰囲気が出てよらしいということにほかなるまい。すなわち、古語で読む行為は、なんら原理的な必然性を持たず、単なる趣味の領域に墮してしまふのである。吉川氏の読み方は、好く言えば個性の産物であり、またそれにとどまり、悪く言えば、我流の趣味にすぎず、訓読と称するには値しないものなのだ。⁽¹²⁾

加地氏は、吉川流の〈新訓読〉よりも伝統的な「翻訳の凍結」を採りたいと述べるが、そもそも、解釈性を前面に押し出す我流の趣味と記憶術を原理とする伝統的な訓読とは互いに次元が異なり、比較の対象にならない。要は、「翻訳の凍結」のごとく、訓読が翻訳であるとの前提に立つから話がおかしくなるのである。単に「定型による読み方の凍結」とでも呼んでおくほうが適切であろう。

だが、話はこれで収まらない。加地氏の論文には奇妙な落ちが着いているのである。御自身は落ちとは思わず、大半の読者も落ちとは感じないかもしれない。しかし、私の目には落ちとしか映らぬ引用で一文が締めくくられている。

加地氏は論文の末尾で、日本人のうちに遠からず東北アジア思想への回帰現象が起こるはずだとし、自信を以て「私には、それが見えるのである」と記したのち、結びとして次のように『論語』の一節を引用する。

『論語』に曰く「つねに之これを習まふ。亦た説よばしからずや」と。⁽¹³⁾

言わずと知れた『論語』冒頭の字句の書き下し文だ。念のために原文を示せば「学而時習之。不亦説乎」。一文の流れから見れば、まずは適切な引用であろう。いったい、どこが落ちなのか。それは「時」を「つねに」と訓じている点である。実際、私は加地氏の論文を読み終えようというときに、この「時に」を目にして失笑してしまった。まさか、これは雑誌の編集部の手に成る読み仮名ではあるまい。加地氏自身の読みだとの前提に基づいて話を進める。

「時」を「つねに」と読ませるのは、多少とも訓詁注釈の知識があれば、驚くには値しない。一般に『論語』の解釈に当たっては、いわゆる古注か新注を用いるのが定石である。古注すなわち「三国・魏」何晏『論語集解』によれば、「時」は「以時」（時を以て）つまり「適切なきに」の義であるという。新注すなわち「宋」朱熹『論語集注』によれば、「時」は「時時」つまり「いつも」の義であるという。この二つの説は今日でも並立しており、たとえば毛子水は「時」を「適當、適宜的時候」と解したうえで「依時」と訳し、また『古漢語常用字字典』は「時」の第五の義として「按時」を挙げ、『論語』の当該句を引いている。一方、錢穆は「時」を朱熹の注釈そのままに「時時」と訳し、また陳振史も「時常」を訳語としている。加地氏の「時に」は新注に従った読みであり、解釈としては特にめくじらを立てる性質のものではない。

ところが、問題は、「翻訳の凍結」を主張する加地氏が「時に」と訓じている点にある。「時」字を見て、だれがただちに「つねに」と訓読できるだろうか。できるわけもない。我々日本人に「時」を「つねに」と訓ずる習慣はないからだ。「つねに」は「時」の定訓ではないのである。結果として、「つねに」と訓読して記憶しても、その読みから原文「時」を再生することはできない。「つねに」という音列から想起するの

は「常」字と相場が決まっており、少し漢文訓読に慣れていても、せいぜい「毎」字をも想起起こす程度であろう。往時、この「時」は「よりより」とも訓じられていたが、その訓は次第に捨て去られ、定訓「ときに」を以て訓読されるようになった。⁽¹⁵⁾言うまでもなく、やはり「よりより」でも「時」字が記憶しづらいからである。

要するに、「時」を「つねに」と訓ずるのは、新注を知っていればこそ納得できる底の解釈そのものであり、加地氏が伝統的な訓読に比べて与する気になれないという吉川流の〈新訓読〉に属する読み方なのである。「翻訳の凍結」こそ訓読の要諦だと主張し、それなら定訓で読んでおけばよいのかと思わせながら、一文の末尾に至って、いきなり定訓を放棄し、解釈をそのまま読み当てる——これを落ちと称せずにいられようか。管見に入るかぎり、この『論語』冒頭の「時」を「つねに」と訓じた例は目にした記憶がない。

面白いことに、吉川氏が当該「時」字をどう訓じているかと言え、定訓を以て「時に」と読んでいるのだ。もっとも、「時に」という日本語は「時どき」「時おり」の意味に受け取るのが一般であるから、そのままでは訓読と解釈にずれが生じて、誤解を招くおそれがある。そこで、吉川氏は古注を採る立場から、「時に」とは、然るべき時、英語でいえば *timely* の意であって、*occasional* の意ではない」と念押しする。⁽¹⁶⁾副詞「時」の説明に形容詞 *occasional* を持ち出している点はともかくとして、丁寧に訓読と解釈のずれを埋めんとした親切きわまりない解説だ。吉川流〈新訓読〉ならば、この「時」は「時によりて」くらいに訓じてもよさそうだが、実際は穩当に定訓を以て訓読しているのである。

加地氏の論文には、全体として大いに共感を覚える。「あいかわらず

〈自由で個性的な学風〉などと絵空ごとを言っている大学は空虚そのものである。そんなことばよりも、〈古典の素養のある人間を作る〉と言うほうがどれほど新鮮であり重厚であり魅力的であることか⁽¹⁷⁾のごとき発言は、まさに正論であろう。大学の末席に身を置く一教員として、改めて大学の本来の在り方について想いを致さざるを得ない。

しかしながら、「時に」の落ちには、失笑しつつも一抹の不安を覚える。一般の読者は、加地氏の論旨に賛成して、訓読の意義を理解し、漢文教育の重要性を認識したとしても、末尾に至って「時に」を目にしたとたん、やはり漢文は難しい、近寄りがたいものだと印象を抱いてしまうのではなからうか。漢字に関する通常の知識を以て「時」字をどうこねくりまわしてみても、「つねに」という読みは出てこないからである。むろん、加地氏は、吉川氏と同じく、「時に」と訓じると「時どき」「時おり」の意味に誤解されるのではないかと危惧し、それなら「時に」と読み仮名を付けておくほうが安全だと判断したのでらう。だが、それがかえって逆効果になりはしまいか、というのが私の不安である。本稿がその逆効果を減じる役目を果たせれば、それに越したことはない。

さて、高橋和巳『李商隠』と加地伸行「漢文は死んだか」について多少の卑見を述べてみたが、御感想はいかがなものでらうか。率直に言って、今でこそ私も少しは落ち着いて生意気な字句を連ねていられるが、数年前までであれば、高橋氏の「Aと訓ずるが、Bの意」式の書きぶりにも多大な当惑を覚え、加地氏が末尾に記した「時に」を落ちと感ずることもなく、「つねに」が果たしてどのような性格の読み方なのか、すっきりと判断がつかなかったことと思う。

現今、漢文教育の衰退はだれの目にも明らかだ。加地氏の一文も、そ

の愁いに端を発している。しかし、最大の問題の一つは、訓読を教える者が、定訓と解釈とのずれが引き起こす気持ちの悪さをいっさい原理的な説明を以て解消しようとせず、「漢文訓読とはそういうものだ」式の怠慢と傲慢で押し通してきた点にある。一再ならず御無理ごもつともが続けば、だれしも学習意欲をなくしてしまっただろう。高橋和巳氏の旧著を読むにつけ、また加地伸行氏の新たな一文を見るにつけ、改めて〈漢文訓読Ⅱ記憶術〉論の有効性を主張することの不当ならざるを覚える。

注

- (1) 高橋和巳「注」『李商隱』四九頁。
- (2) 同右書、八五頁。
- (3) 同右書、五二頁。
- (4) 同右書、一一四頁。
- (5) 同右書、四一頁。
- (6) 加地伸行「漢文は死んだか」五八頁上〜五九頁上。
- (7) 同右文、五八頁下。もと吉川幸次郎・三好達治『新唐詩選』（岩波新書、昭和二十七年）三頁。
- (8) 同右文、五九頁上。
- (9) 注(7)所掲書の五頁に「今の春も看のあたりに又た過ぎなんとす」、六頁に「今春も看のあたりに又過ぎんとす」とある。
- (10) 吉川氏は書評「小野勝年氏訳〈歴代名画記〉」において、「訓読の大きな欠陥の一つは、一つの支那語に対し、原則として一つの国語をしか用意せぬことである。歴史的には必ずしも然らぬが、少くとも現在の訓読はそうである」「歴史をふり返って見るに、王朝に於ける漢籍の読み方は、現今の訓読のように粗雑なものではなかった」と述べている。(『吉川幸次郎全集』第十七巻(筑摩書房、昭和四十四年)五〇二、五〇五頁。
- (11) 本誌第六号(平成十年三月)拙稿「漢文訓読Ⅱ記憶術」論 再検証」九〇頁下〜九一頁下を参照。
- (12) 誤解のないように記しておくが、私見は、吉川氏の読み方は訓読としては我流の趣味にすぎないと主張しているのであり、解釈として価値がないと言っているわけではない。吉川氏の読み方は、解釈として見れば、すこぶる示唆に富む場合が多く、注

(7) の例に見える「看のあたりに」も、その一例たるを失わない。

- (13) 注(6)所掲文、六六頁下。
- (14) 毛子水「註訳」『論語今註今訳』(台湾商務印書館、台北、一九七五)一〜二頁。『古漢語常用字字典』(商務印書館、北京、一九八九)二二〇頁左。錢穆『論語新解』(巴蜀書社、成都、一九八五)四頁。陳振史「註」『四書說本』(大成出版社、台南、一九八四)四九頁。
- (15) 鈴木直治『中国語と漢文』(『中国語研究学習双書』12、光生館、昭和五十年)二三七〜三八頁。
- (16) 吉川幸次郎『論語』上(『中国古典選』3、朝日新聞社、昭和五十三年)一三三頁。
- (17) 同注(13)。

*本稿は、明星大学平成十二年度個人研究費特別増額分による研究成果の一部である。